イザヤ書41章10節 「わたしは、あなたを強くする」

1A 恐れていたこと
1B 自分の罪
2B 周囲の異邦人たち
1C 神々に従う人々
2C 選ばれた少数の民
3B 新しいこと
1C 古い束縛への回帰
2C 自由にある信仰
2A ともにおられる主
3A 強められる内なる人
1B 霊のリハビリによる強化
2B 神の豊かな栄光
3B 恵みによる力
4B 弱さに働く強さ
4A 主に奮い立つダビデ
1B 恐れから敵陣へ
2B 罪に対する懲らしめ
3B 恵みと寛容

本文

おはようございます。今朝は、次のみことばから分かち合いたいと思います。みことばを読みます。イザヤ書 41 章 10 節です。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」

1A 恐れていたこと

先週は、沖縄で、日本のカルバリーチャペルの牧師たちが集まった大会がありました。そこでのメッセージは、今、読んだみことばです。ここを 8 回のメッセージに分けて、何人かの牧師たちが語りました。私も担当し、語ったのは、ここの箇所でも「わたしはあなたを強く」する、という部分です。

私たちは、イザヤの預言は、平日の学びで、去年までここを取り組んでいたので、記憶が新しいかと思います。預言の後半部分、40 章以降は、バビロンがペルシアによって崩壊し、ユダヤ人がキュロス王によって、エルサレムに帰還して、神殿を再建しなさいという布告が出されるということが、背景にあったのを思い出してください。間もなくこのことが実現する前の、バビロンに離散して

いるユダヤ人たちに対して、主が「恐れるな」と励ましている箇所です。
　彼らは、バビロンに捕え移されて、しばらく経っています。70 年近く経っています。キュロスによって、自分たちが解放されることが宣言されるのですが、意外にも、彼らは喜ぶのではなく、かえって恐れるのです。主はこのことを予め知っておられました。それで、恐れるなと励ましています。

　彼らには、トラウマがありました。自分たちの土地から引き抜かれたことのトラウマ。そして、それが自分たちの先祖と本人たちの罪のせいであることの自覚。また、何十年も、異教のバビロンに住んでいることで、少数派として生きなければいけません。そして、すでに生き延びるために、バビロンの生活に慣れています。そこで、いきなり解放と言われても、どうすればよいのか分かりません。また、自分たちがエルサレムに戻っても、周囲の住民たちはそこに長らく住んでおり、自分たちを歓迎するはずなどありません。いろいろな懸念や不安が、内外にあったのです。

　興味深いことがあります。ユダヤ人は、第二次世界大戦中、ナチスドイツによって強制収容所に入れられていました。そこで数多くの人々が死にました。戦争は最終的に、英米を中心にする連合軍による進撃と、ソ連軍による進撃で終結します。英米軍もソ連軍も、強制収容所に出くわします。そこで見たユダヤ人の囚人たちを見て、言葉を失います。生き残っている人々も、骸骨に近いかたちで、極度の飢餓状態だったのです。それで、兵士たちは近隣の町に行き、強制的にパン屋からパンを没収し、ちぎって囚人たちに渡すのです。水も施します。けれども、栄養学を専門とする衛生兵が、やめさせます。「飲んで食べたら、死んでしまいます！」そうです、長いこと飢餓状態の人が、急に食べ始めると、身体が受け付けず、死んでしまうのです。

　これは、霊的にも同じです。あまりにも長いこと、バビロンでの捕囚生活を強いられていた彼らに、自由や解放が与えられると約束されても、そのまま正しく反応できないのは当然です。恐れるのは仕方がありません。それで、主は、イザヤの預言において、優しく語られました。少しずつ栄養を与えるように、回復できるように、慰めの預言を与えられます。「40:1-2「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。――あなたがたの神は仰せられる――エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」」

　これは、日本での宣教においても、大きな課題です。日本に住む人々には「恐れ」があります。日本の人たちが福音を信じようと思う時、戦っているのは、根底には、「自分が仲間外れにされてしまう」という、恐れとの戦いがあります。家族や親族、その他の共同体から外れてしまう、という恐れです。普段の生活では、自分はそうは思っていなくても、不思議なことに信仰について考える時に、出てくるのです。心にある闇との戦いです。

　これは、長い歴史の中で植え付けられたものかもしれません。日本は教会の迫害史において、

世界で第二の国と聞きました。殉教者がローマの初代教会に次いで多いとのことです。キリシタンを撲滅するために、日本は寺請制度を設けました。それぞれの家が、仏教の寺に住民登録しなければいけません。それから、五人組制度も始めました。五つの家を一組にして、そこにキリシタンがいれば、全員、罰せられます。

これらの制度は、明治になってから廃止されましたが、未だ檀家制度として残っています。イエスを自分の主として信じ、バプテスマを受ける時、自分の家の先祖の墓はどうするのか？と悩むのです。この私がそうでした。お墓のことなんかまったく考えていなかった高校生の私が、キリスト教に触れた時に、「お墓をどうすればよいのか？」と悩んだのを思い出します。500 年近く経っても、未だトラウマとなっているのです。

1B 自分の罪

その恐れの初めは、自分たちの過去の罪でしょう。先祖たちが犯した罪があります。今、読んだように、主は、語られました。「40:2 エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」罪が赦されていることを宣言しておられます。しかし、自分が過去に犯したことは、どうしても思い出してしまう。それが、恐れとなってしまいます。

2B 周囲の異邦人たち

1C 神々に従う人々

そして、また、ユダヤ人たちはバビロンに住んでいました。そこは神々を拝む異教で満ちています。そうした周囲の民がいる中で、自分たちだけが、唯一の天地創造の神を信じて、そのことばに従うということには、恐れが伴います。事実、エルサレムに帰還してから、周囲の住民が強く反対し、こう言いました。「エズ 4:12 王にお知らせいたします。あなた様のところから、私どものところに上って来たユダヤ人たちはエルサレムに着き、あの反抗的で悪しき町を再建しております。その城壁を修復し、その礎もすでに据えられています。」反抗的で、悪しき町だと言っています。ただ唯一の神、王をあがめているとして、ペルシアの王に反抗しているとしているのです。

日本語の言い回しで、「角が立つ」という言い回しがあります。角があるので、目立ってしまい、事を荒立てる時に使います。多くの神々を拝んでいる人々の中で、唯一の主イエス・キリストだけを信じているというのは、角が立っていると恐れてしまいます。

2C 選ばれた少数の民

そして、ユダヤ人たちは圧倒的に少数派です。そもそも、彼らが選ばれたのは、多数派ではなく、少数派だったからです。「申 7:7 【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が

少なかった。」日本語には、「多勢に無勢」という言葉があります。少人数が抗っても、多数には太刀打ちできないという意味です。

3B　新しいこと

彼らが、「恐れるな」と励まされたのには、また別の理由があります。それは、主が、彼らのために新しいことをされようとしていたからです。彼らに、離散の地からエルサレムに連れ戻すご計画を持っていました。しかも、それを異教徒の王キュロスを通して行うことを意図しておられました。主はイザヤを通して、何度となく「わたしは新しいことを行う。(43:19)」と言われていました。

1C　古い束縛への回帰

しかし、この希望を与える言葉が、恐れの原因ともなります。自分たちが奴隷としてバビロンにいます。いざ、奴隷ではなくなり解放されても、自分が自由で新しいところに行くのは、不安でしかありません。イスラエルの民がかつて、エジプトで奴隷であったことのほうを選んだことにも表れていました。解放されて約束の地に行くことのほうを恐れていたのです。

2C　自由にある信仰

パウロは、以前の束縛された生活に戻ろうとしているガラテヤ人に言いました。「5:1　キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。」自由は、堅く立ってしっかり守っていないと、その恐れと不安から奴隷のくびきに戻ってしまうのです。

自分はキリスト者になったのだから、もう安心だではないのです。その自由にしっかりと留まっている時に、初めて自由なままでいるのです。前進しなければ、その場で立ち止まることは、キリスト者の生活ではできません。前進しないと、自転車のように倒れてしまいます。あるいは上流に向かって漕ぐ舟のように、前に漕がなければ、後ろに流されていってしまうのみです。

そこで主は、恐れるなと言われます。まず主は、「わたしはあなたとともにいる。」と言われましたね。主のしもべに対して、主は、だれに対してもこの言葉を語られていました。エジプトに戻るのを恐れたモーセにも、「わたしは共にいる」と言われました。後継者のヨシュアにも、約束の地に入るにあたって、「モーセとともにいたように、あなたとともにいる」と言われました（ヨシュア　1:5）。主イエスは、弟子たちに、「世の終わりまで、わたしはともにいる」と言われましたね。使徒パウロは、宣教において、とても困難な時に「わたしは、ともにいる」と言われました。コリントにおいて、反対を受けた時に、心がおびえていましたが、ともにいると言われる主が現れました。エルサレムで騒動になり、牢獄にいる時に、ともにいると言われました。

主がともにいるということだけで、恐れから守られます。キリスト者が行う悪い癖というものが、

いろいろありますが、その一つが「いろいろ説教する」ことです。礼拝で、牧者の説教をいつも聞いています。それで、悩み、苦しんでいる兄弟また姉妹がいると、こうしたらよい、ああしたらよいという助言、あるいは、「こんなことをしたから、こうなっているのだ」という原因探しをします。いいえ、ただともにいることが、どれほどの慰めになるでしょうか？ともにいる、神であるならばご臨在そのものが、人の魂を深く休ませるのです。

そして「たじろぐな。わたしがあなたの神だから。」と言われました。神はいます。この方は全能の方です。いと高きところにおられる方です。この神がおられるのは信じています。けれども、この方が、自分の神になるかどうかはまた別です。「この方は、私の今の状況にまでは関わってくださらないだろう。」と、私たちは思い込んでしまいます。ちょうど、影響力のある人、有名な人が、平凡な自分にまで時間を取ってくれるはずがないと思ってしまうからです。その人に能力があっても、自分にまで関わるほど暇な存在ではないと思うのです。しかし、主は、「わたしがあなたの神だから」と言われるのです。どんな弱き自分でも、この方が自分の神になってくださるのです。国々など、天秤の上のほこりのようにみなす大きな方が、自分の神となってくださるのです。

3A　強められる内なる人

そして主は、「わたしはあなたを強く」すると言われます。

1B　霊のリハビリによる強化

強くしてくださる、とはどういうことでしょうか？身体のことを思えばわかると思います。私たちは、身体は動かさないといけないことを知っています。動かすことによって、初めて身体は強くなることを覚えます。怪我をしたり病にかかったりした後に、リハビリのため、痛くても体を動かすのは、そのためです。

同じように、霊的に委縮していた人々が新約時代にもいました。同じく、ユダヤ人ですが、イエスを信じる者たちです。周りが不信者のユダヤ人で、イエスを告白する彼らは迫害され、圧迫を受けました。それで委縮して、ユダヤ教の中に埋没していく傾向がありました。それで、ヘブル人への手紙があります。著者は、その彼らを、霊の訓練を受ける必要があると勧めました。主からの訓練だと思って忍耐しなさいと励まします。そして、こう言います。「ヘブル　12:12-13　ですから、弱った手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。また、あなたがたは自分の足のために、まっすぐな道を作りなさい。足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろ癒やされるためです。」

私たちは、怪我をしたり、病になったりすると、身体だけでなく心も気落ちするようになります。それで、自分で身体を動かしたくなくなるのです。私の父が身体が弱まっているので、実家に戻ることが多くなりましたが、家に長く居ると、気持ちも小さくなってしまっているのに気づきます。それで、僕は励まします。霊的にもそうです。いろいろな反対や試練を受けていくと、いつの間にか霊的に

傷を受けていて、それ以上、動きたくないと思います。しかし、その時に奮い立たないといけません。主にあって奮い立つのです。

2B 神の豊かな栄光

そしてパウロは、どうやったら、主にあって強くなれるのかを教えています。「エペ 3:16 どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。」主なる神の栄光の豊かさによって、内なる人が強められると教えています。私たちが、主にあって喜ぶことがどれほど大事でしょうか！賛美をし、礼拝を献げることが、どれほど大事でしょうか。主が祈れと命じられたのは、私たちの日々の必要の前に、御名をあがめることでした。「マタ 6:9-10 天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」

礼拝がどれだけ重要かは、ここにあります。賛美と礼拝によって、主の栄光を見ることができます。また、人々の恵みの報告を聞いて、主のすばらしさを知ることができます。気分が落ち込んでいるという時に、実は単純に、日光を浴びていないということがありますね。北欧の国のアイスランドは自殺率が高いと言われますが、それは単純に、日照時間が短いことがあるそうです。ただ、主の輝いている御顔を仰ぎ見るだけでいいのです。栄光を仰ぎ見ているうちに、知らず知らずのうちに、私たちの内なる人は強められていくのです。

3B 恵みによる力

そして次に、私たちの内なる人は、恵みによって強くなります。パウロは、牧会の現場で困難を覚えていた若い牧者テモテに、こういって励ましました。「Ⅱテモテ 2:1 ですから、私の子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。」私たちは、しなければいけないことの責任で、圧し潰されそうになることがありますね。その重責の中で、私たちは自分でも気づかぬうちに、弱くなっています。そこで、もっとこれをしなければいけないのだ、あれをしなければいけないのだと、いろいろアドバイスを受けるよりも、主が私たちにすでに与えておられる恵みを知って、それで強められるのです。

私が、自分の教会の牧会で困難を覚えていた時に、朝デボで、そのことを正直に話しました。するとある友人の牧者が、こういったのです。「もし、清正が召されているのであれば、それを忠実にす、ただ行うだけでは？」というものでした。うまくいかなくなると、何か別のことをしなければいけないと強迫観念のように思ってしまうのですが、いや、すでに主は恵みをくださっているのです。そのことに気づくときに強められます。

4B 弱さに働く強さ

そしてこれに関連して、私たちは弱い時にこそ、その弱さと共に強くなれます。「Ⅱコリ 12:9 しか

し主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」弱くされている時、私たちは恐れます。しかし、キリストの恵みはむしろ、弱くされている時に完全に現れてくれます。自分が弱いままで、実は主が働いておられるということを知る時、私たちの内なる人は強められます。

自分ができなくなる時に、主が憐れみによって、なぜか自分ではないところで、事を行ってくだあします。それを見る時に、私たちの内なる人は強められるのです。たしかに、主はご自分のくびきは軽いと言われました。自分にすべて重荷が背負わされているわけではないのです。私たちが気負っている時に、こうでなければいけないと思っているけれども、そのまま弱さを認める時、実は主は他の人々に賜物を与えて、足りない部分を補っていることに気づきます。

4A 主に奮い立つダビデ

こうやって、主の恵みによって、恐れの中にいても私たちは強められることが分かりました。最後に、ひとりの例を挙げたいです。

1B 恐れから敵陣へ

ダビデが、サウルの手から逃げていた時です。彼は、主によって、二度、救われました。エン・ゲディで、自分たちの隠れていた洞窟に、サウルがたまたま入ってきました。次は、サウルが寝ていた時に、そこにあった槍と水差しを取ってきました。

このように、主によって救われたのに、サムエル記第一 27 章を見ると、「27:1 ダビデは心の中で言った。「私はいつか、今にサウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地に逃れるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、イスラエルの全領土内で私を捜すのをあきらめ、こうして私は彼の手から逃れられる。」」とあります。彼は、いのちが狙われている生活に疲れてしまったのです。主に拠り頼むことをやめて、敵陣にいることによって守られることを選びました。

2B 罪に対する懲らしめ

その代償は大きかったです。彼は、偽りの生活をしていました。アマレク人などの町々を襲って、女子供も一人残らず殺しました。そしてユダの町々を襲ったと、ペリシテ人の領主アキシュに行ったのです。

しかし、サウルとの戦いに彼が加わろうとして、それを断られたことがあります。帰ったら、なんと、自分たちの町、ツィケラグが、アマレク人に襲われていました。女子供も、家畜もすべて奪われました。彼らは涙が出なくなるほど泣きました。そして、兵たちは、ダビデを石で打ち殺そうとさえ考えました。しかし、こう書いてあります。「しかし、ダビデは自分の神、主によって奮い立った。（Ｉサム

30:6）」主によって、奮い立ったのです。彼は、主によって強められました。

3B　恵みと寛容

そして、無事にアマレク人から、妻や子供たち、家畜をすべて奪い返しました。自分が過ちを犯していたのにも関わらず、主が彼を憐れんでくださったことを思ったのです。ダビデは、途中で脱落した兵たちにも、同じように分け前を与えました。「Ⅰサム 30:23-24 ダビデは言った。「兄弟たちよ。【主】が私たちに下さった物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちを襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。24 だれが、このことについて、あなたがたの言うことを聞くだろうか。戦いに下って行った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。ともに同じく分け合わなければならない。」」ダビデは、恵みを知ったのです。それで他の人々にも、恵みをもって分け合ったのです。

これが、主によって強められることです。私たちが恐れから、いるべきところから離れてしまいます。そして、いるべきでないところに行ってしまいます。しかし、主にあって奮い立ちます。そこに、恵みがあります。そうやって恵みを人々に分かち合う強さが与えられるのです。